

始めに・「現代児童文学史」へのモチーフ

藤田 のぼる

1、「始めに」の始まりに

今号から日本の現代児童文学史に関わる連載をさせていただくことになった。二年前に、還暦を迎えてということもあり、自分自身に課すべき仕事として「現代日本児童文学史を書く」ことを思い立ったものの、まったくそのままになってしまっていた。今回、こうしたチャンスをいただいたことを契機に、一步踏み出したいというのがごく正直なところである。

自分が児童文学史を書くとして、きちんと資料を読み込んで時系列的に記述を積み上げていくという方法は、時間的にも僕の体質的にも無理だろうと思った。そこで考えたのは、ある程度時間軸に沿いつつも、テーマというか、観点を立てて、それによって記述していく方法である。そのモデルは、安藤美紀夫の『世界児童文学ノート』（全三巻、偕成社、一九七五〜七七。その後、てらいんくより一冊本で二〇

〇一年に復刊）である。第一巻が「一九世紀的世界」、第二巻が「新しい世紀の空想世界」、第三巻が「新しい現実の世界と幼年の世界」となっていることからみとれるように、時代の流れに沿いつつも必ずしもそれにはしぼられず、ジャンルや問題意識にそって項目を立てている。この本が出されたのは、僕がちょうど評論を書き始めたころになるが、「ノート」という控えめなタイトルを越えて、淡々とした記述の中にさまざまな問題提起が飛び交うその書きぶりは、きわめてエキサイティングだった。

この連載は、僕自身の準備不足や、18枚×6回というスペースの問題もあり、更にその「ノート」のためのメモといった内容になってしまおうとは思いますが、ともかくも第一歩である。これから述べていくように、「児童文学史」は過去をほじくりかえすためではなく、今とこれからのためにある。また評論・研究の分野の読者だけのためだけでなく、児童文学の創作や普及に関わる人たちのために「ため」